

HRE032-05

会場:203

時間:5月22日 17:30-17:45

## 農地の地形変化と農業的土地利用 内蒙古中西部およびケニア中央高地の事例 Geomorphic Changes and Agricultural Landuse: Cases in the Inner Mongolia and the Kenyan Central Highlands

大月 義徳<sup>1\*</sup>

Yoshinori Otsuki<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 東北大学大学院理学研究科

<sup>1</sup> Graduate School of Science, Tohoku Univ.

定着農業において、農地の土地条件は自然環境資源の一つと捉えられ、農業的土地利用・管理のあり方に重要な意味を持つ場合がある。本報告では中国内蒙古自治区中～西部、およびケニア中央高地の農耕地域の事例から、地形プロセス・地形変化の強度と土地利用の関係性について検討する。

中国内蒙古自治区では、乾燥・半乾燥地域の呼和浩特市武川県におけるガリー浸蝕発現地域およびアラ善盟左旗烏蘭布和沙漠東縁地域を取り上げる。とくに後者地域では近年1～10 m/yrの沙地前進速度が見積もられ、現在沙地前縁農地では収益性は高くしかし非持続的な農業経営がなされている(本セッション、佐々木達ほか発表)。一方、上記ガリー浸蝕・沙地前進はそれぞれ完新世前～中期に発現し、過去数千年間卓越した地形プロセスと考えられる。

ケニア中央高地では、主に表層崩壊斜面の分布する熱帯高地 Aberdare 山地東部地域、および半乾燥・半湿潤地域の Laikipia 平原を取り上げる。後者地域は約2000～3000年前以降の布状浸蝕による斜面更新が発現し(本セッション、佐々木明彦ほか発表)、熱帯高地からの流下河川沿いで灌漑の周年利用の可能な場所を中心に農業が営まれている。Aberdare 地域での斜面崩壊(しばしば人命の損失を伴う)は数百年単位の周期性を持つと考えられ、とくにこれに対応した土地利用・農業経営はみられない。しかし強雨・雨滴による土壌浸食(耕地浸蝕)を意識した農地利用はしばしば認められる。

両地域の事例を通して、各地域の耕地・土壌に関する土着伝統的な知恵あるいは民族土壌学的知識体系と、個別地形プロセスとの関係とその強弱をより詳細に明らかにすること必要であり、これにより自然環境資源としての土地条件の重要性がさらに高まると予想される。

キーワード: 土地条件, 地形プロセス, 農業的土地利用, 内蒙古(内モンゴル), ケニア

Keywords: Land condition, geomorphic process, agricultural landuse, Inner Mongolia, Kenya